

# 公孫樹

2024年1月発行

第144号

浄土宗慶蔵院

伊勢市小俣町元町1211

TEL 0596 (22) 3726



慶蔵院の阿弥陀様 画 山寄淑子

旧年中、いろいろとありがとうございました。今年もよろしくお願い申し上げます。三月の母親の極楽往生は、私たちに「現世往生」の自覚を遺してくれました。「今日の私に死んで明日の私に生まれる往生の道」を立往生することなく、南無阿弥陀仏と進んで参りたいと決意しています。

お釈迦様が説かれたのは。

人間の苦悩の解決の方法…八正道でし



成道会に参加された方よりお手紙をいただきました。長く写経会に参加されてきた市内在住の方です。

今年もあと僅かでございます。十二月の成道会には初めて

参加させて頂きました。楽しくて笑って感動して心もお腹も

暖かくなりました。そして慶蔵院に溢れる皆さんのパワーにも

元気を頂きました。

南無阿弥陀仏と唱えながら新しい年を迎えたいと思っております。

感謝

お手紙ありがとうございます。ご自身の健康上の課題を、写経を続ける中で元気に克服されているお姿に、私たちがパワーをいただいています。

当日の尺八演奏を聞かれた麻畑さんが「豆知識」に感想を書いておられます。「伊藤製麺」の伊藤昇さん、全国優勝の音色です。同じく全国優勝、春日八郎唄ぶ会の金谷昌俊さんの熱唱。毎回続けてほしいとの要望が届いています。音響では、発明家の堀江さんにお世話になりました。風に負けない墓参セットが大好評。

山添真寛上人（「浄土宗劇団ひとり」さん）からのお手紙です。

南無阿弥陀仏 先日の成道会では又々、大変お世話になり誠にありがとうございました。慶蔵院ならではの成道会に参加できている事がとてもうれしく思いました。出来るなら五年は新しい構成をトライして皆さんにお届けしたいと…、とにかくがんばります。どうか引き続きパワーをよろしく願います、合掌

当日質問があった「八正道」については二ページにまとめました。

# 1月の行事予定



8日(月)	華道「山村御流」教室 講師 小森清真先生	午後1時半～ 参加費2000円 と 花代
10日(水)	写経会 落語会「いちご亭」 南遊亭栄歌・安楽亭東風	午前10時～ 午後7時～ 一会館にて 無料 おひねり歓迎
17日(水)	健康教室 歩き方教室 講師 馬場久美子先生 男性詠唱隊	午後1時～3時 参加費500円 午後7時～
13日・27日(土)	絵画サロン 講師 山寄淑子先生	午後7時～8時半 一会館にて 参加費1回500円
24日(水)	地藏講・地藏堂開帳	午後1時半～
25日(木)	戦没者慰霊平和の鐘	朝の勤行にて 午前8時頃
11日(木)	ともいき英語サロン 講師 三浦邦昭先生	午前10時～11時半 午後1時半～3時 一会館にて 参加費1回1000円
12日・26日(金)	茶道教室 講師 河井宗恵生 樋口宗恵先生 田島宗紀先生	午後7時～子供茶道教室 7時半～大人茶道教室 大人500円 一会館にて

苦悩を克服するためには八つの正しい道(方法)があるとお釈迦様は覚られました

山添真寛上人への質問がありました。「八正道」について詳しく教えてください…と。

下記のように整理しました。

- ①私の意識を離れ正しく物事を見ること(正見)、②正しく物事の道理を考えること(正思惟)、③真実のある正しい言葉を語ること(正語)、④正しい行為。間違っただ行いはしない(正業)、⑤正法に従って清浄な生活をする事(正命)、⑥正しく目的に向って努力すること(正精進)、⑦邪念を離れて正しい道を思念すること(正念)、⑧正しく精神を集中して安定させること(正定)…これらの修行を積むこと

にこそ煩悩を無くし、解脱を成ずる一途が示されています。お釈迦様はお説きになりました。

慶蔵院豆知識

part2

⑧

成道会での不思議な体験

去る十二月十日の成道会で、故神谷先生のご指導をいただいたいき育てたホウレン草パウダーを練りこんだ手延べ麵を作っていた。いて、桑名の伊藤製麵所の伊藤昇さんにお越しいただき、尺八の演奏を賜りました。私は、須弥壇に向って左側の脇陣に詠唱隊の一員として座って拝聴しておりました。演奏が始まると、阿弥陀様の方から不思議な声のような音が聞こえてくるではありませんか。一瞬これは何だと思いましたが、阿弥陀様が喜んで下さっているのだと思えて来ました。和尚さんの話だと、伊藤さんはかなりの念仏者だそうで、内陣へ上る所作もきちんとしておられ、阿弥陀様へのお辞儀もされておられました。尺八は竹製で長さ五十五センチほどで、管の外側を斜めに削り落として作った歌口に息を唇から直接吹き付けて音を発し、音高の変化は五つの指孔の開閉と息の圧力及び角度によって得られるそうです。難しそう！尺八には豊富な倍音が含まれ、魂を揺さぶるのだそうです。又楽器ではなく、法器と呼ばれ、悟りを開いて宇宙的な何かとの一体化を果たすための聖なる道具で、禅の修行者(虚無僧)が尺八を手放さなかった理由もここにあります。梵鐘の音にも共通するものがあり「一音成仏」という言葉があります。あの声は、伊藤さんの人格と慶蔵院という場が織り成す出来事だったのでしょか。

(文) 麻畑公生

八十年たって「今しかない

！」と戦争中の学童疎

### 開地訪問

写経に毎回参加されている方の中に、三人の八十九歳の方がおられます。常々お元氣な真剣な姿勢に頭が下がる思いです。そのお一人からこのようなお話をうかがいました。

戦争中に疎開されていた石川県のお寺を「今しかない」と訪ねてみたくなったのだそうです。その思いに応えて、お嫁さんが車で走ってくれました。浄土真宗のお寺です。

迎えに出てくれた坊守さんから思わぬ言葉…。「あんた覚えとるよ。私より一つ下やったやろ。よう来てくれたな。面影あるは…」

八十年ぶりの再会。この時空を超えるご縁の不思議さ。このご縁も、動かなければ出会えないものです。なんと有難いことか…。思いや願いや支えの心がよせ合わさった結果、生ずる奇跡。仏様の「はからい」そのものではないでしょうか。この



### 住職の健康回復への道のり(23)

一月十四日が来ると、八尾に通院し出して二年となります。体調変化についての実感は「おかげさまで、とても元気に、毎日、気持ちよく生活させていただいています」とお伝えします。「心配いただきありがとうございます」

院長先生からは「油断してはならない。無理をしないように。食べ過ぎに注意。調子に乗るな」と厳しく指摘されて、日々、丁寧に見守っていただいております。

先日、「睡眠時無呼吸症候群」の四回目の検査を行いました。睡眠の深さやイビキをかいていないことの実感があり、きつといい結果がでる…と自信を持っていました。しかしながら「20秒呼吸が止まっている」との記録報告。これでは心臓に負担がかかってきます。まだまだです。健康回復への「必要な取り組み」、さらに精進していかなければ

### 松過ぎてまた歯車が回り出す

奥田 悦生  
(「知恩」一月号「柳壇」に掲載)

落語会「いちご亭」  
第2水曜 10日 午後7時 無料です  
慶蔵院二会館

出演 法話 慶蔵院住職



### 麻畑公生の「浄土宗新聞」 見どころ・読みどころ

伊藤唯眞猊下の「年頭に思う」 1ページ

伊藤猊下は、祝聖文を引いて平和問題に言及されておられます。しかし、現実には、はるか昔より戦争は絶え間なく起こっています。カントの「永久平和のために」も常備軍の全廃、諸国家の民主化、国際連合の創設などの具体的提起を行い、人間ひとりひとりに平和への努力が必要だとうたっています。しかし世の中には、そういうことを全く受け入れない人がいます。貪(欲)のかたまりで、人の命など何とも思わない人間です。戦争は金儲けの最高の手段ですから。戦争が絶えないのは、もっと深い根源的な何かがあるのかもわかりません。



二月の行事予告

二月十一日(日)

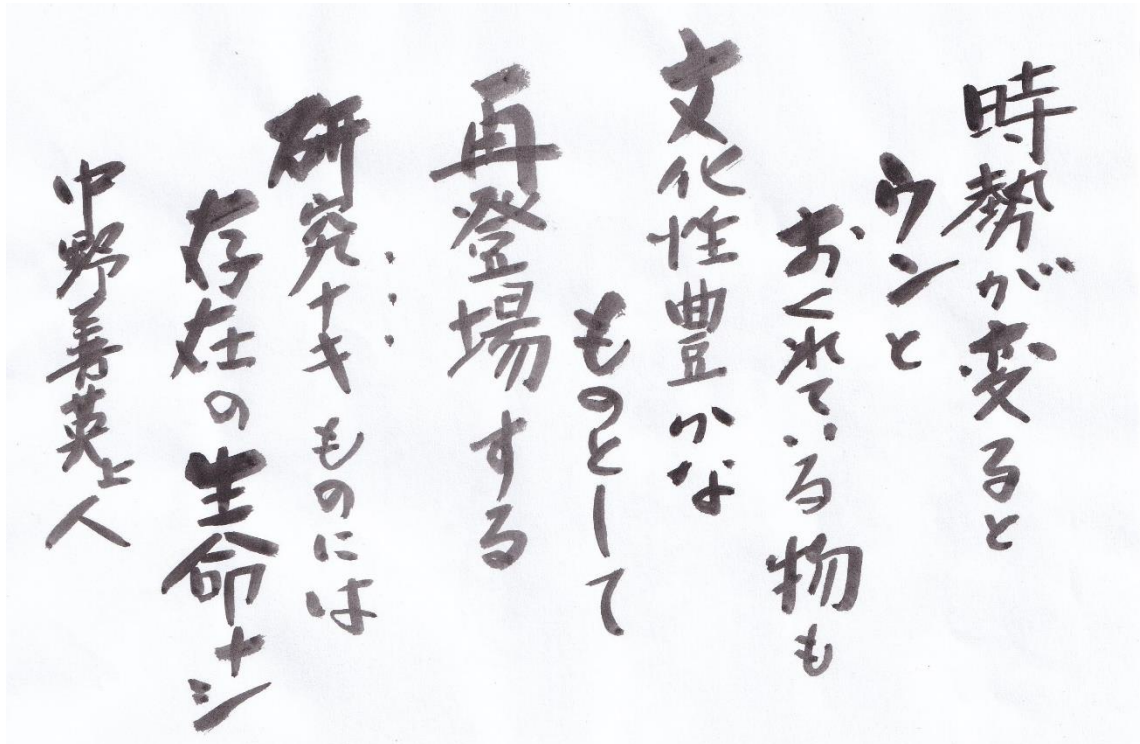
午前10時子ども会

第一部 絵本・紙芝居

第二部 紙芝居・人形劇







時勢が変わると

ウンと

おくらてる物も

文化性豊かな

ものとして

再登場する

研究ナキものには

存在の生命ナシ

中野善英上人

初めての朗読会。挨拶をかねて十分間、話をせよとのこと。何を話そうか…。資料を見せてもらった中に、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」があった。「雨」についてこのように受け止めた…と語ろうと思った。

賢治が亡くなってから見つかった手帳に書き残されていた言葉。法華経信者であった賢治の仏道から紡ぎ出された言葉、これが「雨・・・」だったのだと。

この世は堪忍土である。その苦しみに耐えることのできる心と身体をつくれ。三毒煩惱に支配されることなく、我欲を捨て、腹を立てず、愚痴を言わずに、笑って相手を受け入れる…。常に自分を勘定に入れることのない利他行。自分の足元からできることを一つ一つと積み重ねていく信仰の道。

死にそうな人に「何もかもが無くなってしまわない。生命は永遠に繋がっていくのだから心配するな。行くところは用意されている。みんなご先祖様になるのだから…」と安心してもらおう。それが務め。

けんかは「つまらない」。対立からはなにも生まれてこない。自分に正義があると言い張れば必ず対立が生じ、相手を否定し、戦争まで引き起こしてしまう。愚かなことは「やめよ」。

日照りの夏ではない。賢治はヒドリと書き残していた。日取りとは日雇いのこと、つらい労働の姿の中に、賢治は涙を流した。どうしたらすべての人が安穩に幸せに生きることができるのか…。どうすることもできない自然の脅威にはオロオロとするばかりだが、人の評価を気に掛けることなく、一人決然と立って、後に続くものを信じて前に進め…と訴えた。